



はじめに

時代は、里山から吹く新しい風を求めています。

大転換期を迎えた世界は、新たな発想を求めています。世界が直面する大きな課題は、人間と自然との共生です。そして今、人と自然の長い対話の歴史から生まれた里山は、その価値を高めています。

里山は、わたしたちに発想の転換を促してくれます。生態系に中心はありません。自然は動的なネットワークで被われています。里山を、管理という発想で持続させることはできません。里山は、これまで社会に発展をもたらした「選択と集中」「部分最適化」「縦割り」という発想を受け付けません。里山は、わたしたちに社会の潜在的な可能性を引き出す「出会いを生む有機的分散」「全体最適化」への発想転換を促しています。里山は、多様さや複雑さを積極的に受け入れ生かす技術、ひとりひとりの人間を総合化する主体として捉える「人格を持つ技術」への転換（技術革新）を促します。これらのパラダイム転換は、文明の危機を意識した世界の知性が求めている動きと一致します。里山は、わたしたちに新たな思考を与え、社会にイノベーションを起こす場になります。

里山から吹く風、それは未来に行き詰まりを感じた社会に、新たな知性を送り込む風です。それは、緑の知性です。緑の知性は、社会に発展をもたらす資源を暗い地下深くからではなく、人間や社会に潜在する出会いが放つ光の中から浮上させようとしています。そして、その芽生えただけの緑の知性を育て発揮させるのは、わたしたちです。

わたしたちは、この度、里山から吹き出す新しい風に乗せて、社会に新たな発想や価値を送り込むことを目的に、株式会社新しい風さとやまを設立いたしました。

株式会社新しい風さとやまは、里山を新たな価値を創造する場に変えていきます。そして、人々には、未来に向けて吹き抜けていく爽やかな里山の風に乗せて、多様な生物と共に育てられた農作物や加工品などをお届けしていきます。

株式会社新しい風さとやまは、里山を舞台に人や社会に潜在する可能性や価値を浮上させ、自然と共生する活力ある社会のあり方を提案します。

2016年1月1日

株式会社新しい風さとやま

発起人

飯島 博

牧 文一郎

新しい風さとやまは、アサザ基金が霞ヶ浦北浦流域で展開して来た持続可能な社会モデルを地域産業モデルとして発展させ、広大な流域を被う実物大社会モデルの実現を目指します。

霞ヶ浦北浦流域各地では、NPO 法人アサザ基金が20年間にわたり持続可能な循環型社会の構築を目指して先進的なモデル事業（アサザプロジェクト）を実施してきました。これらの取組みは、多様な主体の協働による創造的な地域づくりの取組みとして高く評価されてきましたが、広大な霞ヶ浦北浦流域の中ではまだ点の複数分布に留まっています。

これらの点を面に展開していくためには、新たな発想による取組みが必要です。広大な流域を被うネットワーク状の水系に重なる形での事業展開を実現するためには、流域の農林水産業や地場産業等と本格的に連携した取組みを、新たな産業形態として創り上げていく必要があります。しかし、それには、大胆な発想転換が求められます。流域に広がる水系ネットワークに重なり合う形での産業形態の実現は、従来からの選択と集中という発想では実現不可能だからです。

選択と集中から、良き出会いの連鎖を浮上させる有機的分散による事業展開への転換。わたしたちは、これを持続可能な循環型社会の実現に不可欠な21世紀型の事業形態、つまりパラダイ

ム転換であると考えます。なぜなら、今世界はあらゆる分野で集中化から分散化へと思考様式や技術形態を転換しつつあるからです。様々なイノベーションは、まさにこの流れの中で起きつつあります。

霞ヶ浦北浦の再生に向けて、複雑で広大な流域を被う取組みを実現するためには、従来からの手法や発想を大胆に転換する必要があります。少なくとも、湖の再生が行政や研究機関等が行なってきた選択と集中や縦割り、部分最適化による発想では困難であったことは、これまでの実績を見ても明らかです。このように従来の発想の限界を明らかにしてくれる霞ヶ浦北浦流域は、人々に発想の転換を促し社会にイノベーションを引き起こす場として最適であると考えます。

わたしたちは、このような理念に基づき、新しい風さとやまを立ち上げることを決意しました。アサザ基金が蓄積してきた経験と実績を生かして、点から面への展開をはかり実物大社会モデルの実現に向けチャレンジしていきます。アサザ基金が以前から取り組んできた霞ヶ浦や北浦、牛久沼流域での水源地保全再生事業を拠点に水系レベルへの拡大をはかり、10年以内に流域内の水源地谷津田で300ヘクタール規模、10事業地域以上に拡大し、さらに農業を社会の多様な分野と結び付け、湖沼や流域全体に影響を及ぼす事業(持続可能な社会モデル)へと発展させ、社会にインパクトのある事業を実現します。

霞ヶ浦等の流域全体に拡大する深刻な事態、水源地谷津田での耕作放棄問題に対応するために、谷津田を新たな価値を創造する場に変え保全再生していきます。

アサザ基金では、これまで霞ヶ浦等の水源地で耕作放棄地対策を行って来ましたが、しかし、今後TPPや農家の高齢化、後継者不足等の社会状況の変化によってさらに耕作放棄地が増加し、事態がより深刻化することが予測されています。

流域全体に分布する多くの谷津田が耕作放棄地になっていくと、湖沼の水循環が乱れたり、水源地に生息してきた里山の生き物達に大きな影響を及ぼすことになります。また、荒廃によって谷津田の水田が持っていた治水機能が失われると、下流地域での洪水が増加する恐れがあります。もちろん、美しい日本の原風景里山の景観も失われます。

このような事態が水系レベルで起きることが予測されていても、従来の行政等の自然保護や環境保全による取組みでは対応が不可能なことは、これまでこれらの施策によって谷津田保全対策が実施されてこなかったことから明らかです。水系レベルでの保全再生を実現するためには、従来からの自然保護の発想(問題解決型)から、価値創造型への転換が不可欠です。アサザ基金は、このような転換を企業等と協働で行なってきましたが、社会変化に対応するために企業的な発想による事業の拡大と展開が必要となり、新しい風さとやまを設立しました。

新しい風さとやまは、このような社会的使命を持って、条件不利地域として次々と放棄されていく谷津田に新たな価値を創造することで、湖の水源地と里山を保全再生していきます。

里山の命の箱舟谷津田を保全再生し、流域レベルで生物多様性を守ります。

絶滅が心配されている里山の生き物の大半は、水源地である谷津田とその周囲に生息しています。メダカやホタルなど、数多くの生き物が、水源地周辺に身を寄せ辛うじて生き延びてきました。

それらの生き物達が生息地を確保する上で、地域の農業によって維持されてきた谷津田の水田や小川、ため池などの水辺環境は極めて重要なものでした。特に、水源地は湧水があるため農業の影響を避けることができ、多くの水田が乾田化される中で生物が冬越しできる湿田が維持されていたため、多くの貴重な動植物が生き残ることができました。しかし、これらの水源地谷津田での耕作放棄が進むと、水辺環境の維持が困難となり、周辺の里山環境にも大きな影響を与えます。

水田や小川などの水辺は放棄されると、草で覆われやがて枯草や土砂などに埋もれていって水面が無くなっていきます。水面が無くなると、メダカやホタル、カエル、トンボなどの生き物が棲家を失い、周囲の里山全体の生態系のバランスも崩れてしまい、タカやフクロウ、キツネなどの高次の捕食者の生息も困難になってしまいます。

しかし、逆に谷津田の保全再生を広域レベルで実現できれば、生物多様性の箱舟（谷津田上流部）から水系を通して流域さらに湖へと生物を供給していくことが可能になります。その効果は大きく、計り知れません。

新しい風さとやまは、水源から湖まで、水系レベル、流域レベルでの生物多様性保全を実現し、将来朱鷺が普通に見られる環境を目指します。

日本最大のウナギ生息地の復活を目指します。

また、流域に広がる谷津田は最近絶滅危惧種となったウナギの生息地として適しています。霞ヶ浦流域には、ウナギの生息地になる谷津田が数多く、流域を覆うようにネットワーク状に分布していることから、日本一の天然ウナギ産地を形成してきました。1960年代まで、全国で採れたシラスウナギの3分の2は霞ヶ浦が利根川と合流する下流部で採れていました。ですから、この事業は霞ヶ浦のみならず日本のウナギの未来の命運を握る取り組みでもあります。

近年ニホンウナギの減少が著しく、これらの谷津田を守っていかねば、ウナギのみならず多くの生物が絶滅に追い込まれ、湖の再生も不可能になります。そのためにも、流域全体の谷津田ネットワークを守らなければなりません。

新しい風さとやまは、事業をとおして社会の多様な分野や人々を結びつけ、同時に、谷津田と湖と海を繋げていき、ニホンウナギを復活させます。

農業の大規模効率化によって切り捨てられる谷津田や里山の農業（マイナー農業）から新たな価値を創造します。

昨今の社会情勢の変化（TPP等）により、国内農業が大きな影響を受けることは、報道等をとおしてご存知だと思います。このような状況下で国は農業生産の効率化大規模化などの方針を示し、それらへの転換や投資を促しています。しかし、このような農業政策は大型機械や農薬、遺伝子操作などへの依存を強めることになるでしょう。

国の農業政策には、さらに大きな盲点があります。大きな社会問題となっている耕作放棄地の拡大です。耕作放棄地の全国での総面積は滋賀県と同じくらいあると言われています。それらの耕作放棄地の多くは、霞ヶ浦や牛久沼の流域にネットワーク状に分布する水源地谷津田のように面積が小さく泥深く大型機械が入れない水田です。

効率化大規模化を推進する農業の大半は、土地の広い地域に限られ、霞ヶ浦など水源地谷津田の様な効率化大規模化が困難な地域（マイナー農業）は除外されてしまいます。実は、これら条件の不利な地域ほど地域の生態系や水環境を支える上で大きな役割を果たしていることが理解されず、現在の政策では全く視野に入っていません。

しかし、いつの時代も大きな社会変革は、マイナーな存在が浮上することで起きるものです。日本の農業が大きな岐路に立たされている今だからこそ、生態系や生物多様性、水環境などを支える谷津田や里山が有する価値を農産物等によって表現し、社会が共有する価値として浸透させていく取り組みが必要です。新しい風さとやまは、これらの価値を表現する高付加価値の物づくりを実現させていきます。

企業や地域やNPOとの協働により水系のネットワークに重なる人的社会的ネットワークを構築していきます。

これまでアサザ基金では霞ヶ浦北浦の再生に向けて、流域に数多く分布する谷津田の耕作放棄拡大を防止し水源地保全や生物多様性保全を図る取り組みを、企業や地域団体、住民と共に進めてきました。これらの取り組みは、企業や地元の酒造会社や醤油醸造会社等との協働により、新たな地域ブランドの創出という形での地域活性化としても注目されてきました。しかし、それらの取り組みはまだ霞ヶ浦や北浦、牛久沼の各流域の特定の地域(点)としてのモデル事業の域を出ていません。つまり、自然のネットワークと重なり合う事業展開はまだ実現できていません。

先述したように、今日の農業をめぐる環境は大きく変化し、耕作条件の不利な谷津田は、急速に耕作放棄が進んでいます。農業後継者の減少もあいまって、今後はさらに多くの谷津田の荒廃が進み、霞ヶ浦や牛久沼などの再生が困難な状況に陥る恐れがあります。

新しい風さとやまは、このような大きな社会問題を解決するために、アサザ基金がこれまで企業等との協働で行ってきた谷津田再生事業での実績や作り上げてきたネットワークを生かして、活動の規模を点から面へと転換し実物大の社会モデルとして霞ヶ浦等の水源地保全を実現させるための事業を立ち上げていきます。

水源地谷津田の特色を生かし、マイナスをプラスに転換して、付加価値の高い農業生産システムの確立を目指します。

流域に分布する条件不利農地谷津田での活動範囲を拡大するために、水源地の特色を生かした付加価値の高い米づくりを推進します。アサザ基金には、これまで10年以上水源地に適した酒米の栽培を無農薬無肥料で行ってきた実績があります。良質の酒米の栽培には肥料分の少ない水、つまり水源地にある谷津田が適しています。最近では、良質の酒米の供給が酒蔵での需要に追いつかず、酒米不足の状況にあることから、今後谷津田で生産する酒米にも十分な需要が見込めます。酒米以外にも一般の食用の米についても、谷津田は周りを森で囲まれ水源地であることから、夏期の高温期に涼しい環境が保たれるため美味しい米が穫れるといわれています。

また、アサザ基金がヒシクイ保護基金から引き継ぎ、18年以上の実績を持つ日本で初めての自然保護の産直米オオヒシクイ米の経験を生かして、里山ブランドの産直米の生産も行っています。さらに、米以外の大豆、菜種等の栽培、田んぼの貸し出し制度オーナー制度や、首都圏に位置することを生かした里山でのエコツーリズムやグリーンツーリズム、バイオマスエネルギー、地産地消、エコカフェ、教育、福祉、地域づくり、アートイベントなどの様々な取り組みへと展開していきます。

生き物たちと相談しながら、生き物たちに評価してもらい農業を実践します。畑地ではビオトープ農法を普及させます。

アサザ基金は、これまで各地の谷津田や畑地で、生き物たちと相談しながら進める農法の実践を積み重ねてきました。十年以上の経験と技術的な積み重ねにより、生物多様性を生かした無農薬栽培による農作物の生産を実現してきました。この間、多様な生物に守られ大きな病害虫の被害もなく農産物の生産を行うことができました。

水田のように水辺がなく多様な生物が生息しにくい環境の畑地では、ビオトープ（水辺）を設置して、天敵となるカエルやトンボ、野鳥、クモなどの誘致をはかり、害虫の発生を抑えることができました（ビオトープ農法）。畑地にビオトープを配置していくことで、生物の移動路を広げていくこともできます。新しい風さとやまは、アサザ基金が企画し実施してきたビオトープ農法を、流域に広げていきます。

新しい風さとやまは、里山に棲息する多様な生き物たちと相談しながら行う農業をとおして、生き物たちと相談しながら進める町づくりや社会づくりへと発展させていきます。

今回わたしたちが株式会社（農業法人）として取り組む社会的意義は、水源地や生物多様性の保全を付加価値として持つ農産物の本格的な生産を行い社会に広く流通させることで、これらの価値を農業のみならず社会全体に広く浸透させることにあります。霞ヶ浦など里山の生態系や生物多様性、景観等を維持すべき重要な価値として多くの人々が評価し、社会全体で「生き物たちと相談するシステム」を実現させようというものです。これによって、トキやコウノトリ、タカ、オオヒシクイ、ウナギなどの生物が霞ヶ浦等の広大な流域全体に生息できる社会を実現していきます。

農業を社会の様々な活動と結び付けて、新たな価値を創造する場を広げていきます。

縦割りの壁を越えることができなければ、社会に化学変化も新たな価値創造も起こすことはできません。農業も、社会の縦割りを越える繋がりをいかに作るかが課題です。わたしたちは、アサザ基金が20年間培ってきた縦割りの壁を越えた多様な分野とのネットワークを生かして、地域の農業を社会の多様な活動や分野と結び付け、その潜在的可能性を浮上させ、広大な湖と流域全体を新たな価値を創造する場に変えていきたいと考えています。当面は、下記のような分野や人々と協働して取り組んでいく方針です。

- ・ 一次産業、農業、林業、内水面漁業、畜産業
- ・ 地場産業、酒、みそ、しょうゆなどの醸造業、煎餅や佃煮など加工業、魚粉・堆肥などの肥料製造業、BDF 製造・発電などのエネルギー産業
- ・ 企業、CSR との連携、ビジネスモデルや技術開発
- ・ 観光、エコツーリズム、グリーンツーリズム、外国人向け日本文化体験
- ・ スーパーなどの流通業、食品加工・販売、レストランなどのサービス業
- ・ 地方公共団体、小・中学校、福祉施設、研究機関
- ・ グリーンコンシューマーとしての市民、企業
- ・ NPO—全体最適推進のための企画立案・ネットワーク作り・調整機能を発揮する。

日本の農村の伝統文化を継承し未来に向けて発展させていきます。

谷津田は里山の環境を構成する重要な要素です。森から清らかな湧き水が得られる谷津田周辺では、縄文時代や弥生時代から人々が住み着き、現代まで様々な文化を生み出して来ました。洪水が頻発する下流の川や湖から離れた上流部にある谷津田は洪水被害が少なく、干ばつ時には湧き水が灌漑用水として確保されるなどの理由から、安定した米生産が可能な場所として大切に守られてきました。昔の人々はこの谷津田での米生産をベースに暮らしや文化をつくり、谷津田での生産量に見合った大きさの集落を形成してきた歴史があります。このような歴史の中で、里山の美しい自然景観も生まれてきました。

谷津田の農業は、日本の伝統的な農村文化や自然景観を育んできた礎でもあります。そこには、人と自然が共存する文化の原点があります。地球環境問題がクローズアップされている現代、里山の文化は世界に展望を与える、日本が誇るべき文化です。新しい風さとやまは、谷津田の生物多様性や水源保全を図るとともに、里山から生まれた伝統文化を継承し発展させ、人と自然が共存する持続可能な循環型社会の実現に向けて取り組んでいきます。

価値創造やイノベーションが起きる現場で未来を担う若者たちを育成します。

農業の担い手不足は以前から大きな課題となっています。新しい風さとやまは、新しい発想による農業の実践をとおして農村に雇用の機会を増やし、新しい社会の作り手や担い手となる若者たちの育成に取り組めます。

若者たちには、技術革新や価値転換やイノベーションが起きる現場を当事者として体験してもらい、人や社会の潜在的な可能性を浮上させビジョンを描く構想力や、新たな価値を創造し未来を切り開く行動力を育てていきます。さらに、自然や社会が有する多様さや複雑さを受け入れ生かすことができる豊かな生き方を、若者たちが里山で働くことを通して見出していけるような場を創り上げていきます。

管理から対話へ、人格を持つ技術を育成していきます。

かつて各地の農村にあった村の鍛冶屋では、農家ひとりひとりの体型や年齢、田畑の形状や土壌条件などに合わせて、ひとつひとつの農具を仕上げたと言われています。自然と共生する農業や社会の構築には、このような多様さや複雑さを受け入れ生かしていく技術、つまり、総合化する主体としての人格を持つ技術が不可欠です。

現代社会が抱える多くの問題は、合理的効率的な管理によって生産性を向上させるために自然や人間が本来有する多様さや複雑さを均し画一化する発想（技術のあり方）に起因するものが少なくありません。このように近代技術が画一化効率化を追求するあまり、自然や人間が有する多くの価値が見失われました。

しかし、里山は、このような近代の技術観を全く受け付けません。里山は、管理によってではなく、自然と人間との対話によって生成し続けるひとつの場です。里山は、人間や自然が有する多様さや複雑さを受け入れ生かすことで持続可能な農業生産を行ってきた場でもあります。

里山を自然保護や生態系管理という発想で持続させることはできません。里山は、人々に思考を促します。いま持続可能な社会を目指し発想の転換が求められる中で、里山のこのようなあり方が見直されています。

新しい風さとやまは、一枚一枚の田んぼや畑の特性を、そこに暮らす生き物たちとの対話を通して感じ取り、それぞれの場に合わせた技術を、現場に関わるひとりひとりの人格を生かすことで、つまり、個々の人格を多様さや複雑さを受け入れ総合化する場として機能させることで、実現させていきます。わたしたちは、そのような人格を持つ技術を習得し、新たな発想で農業を活性化し社会にイノベーションを起こすことができる若者の育成に努めていきます。

NPO 法人アサザ基金と協働で社会を変革していきます。

新しい風さとやまは、社会を変えるために本格的な農業と同じ土俵に立ち、新たな価値を持って真っ向勝負を挑んでいきます。この取り組みは、農産物をめぐる競争の中に飛び込むことでもあり、大きなリスクを伴うことも事実です。しかし、地域限定の理想郷(点)を所々作っていても社会を本当に変えることは出来ません。社会全体を視野に入れた取り組みが必要です。

新しい風さとやまは、社会にネットワークを広げ続け多様な主体と実験的な取り組みを展開し続けるアサザ基金と協働で、農業を社会の多様な分野と連結させ、これまでにない高付加価値の農産物生産を実現していきます。

新しい風さとやまは、NPO と企業の協働モデルを実現させ、誰もが見離した条件不利な農地を対象に、高付加価値の農産物を生産し、水源地や生物多様性といった価値を共有する人々の輪を社会に大きく広げていきます。わたしたちは里山イノベーションによって、新しい風を社会に力強く、そして爽やかに送り込んでいきます。